

# 北海道の民屋

島之夫

## 一、序 説

北海道は本土の最北部にあり、總ての點に於て奥羽以南の内地と異なる。先づ氣候に於ても寒冷であり、住民の種類は元來アイヌの占居せる土地であつたことと、内地よりの移住者の出身地が奥羽地方及び北陸地方に多く所謂北日本の特色を備へてゐることにより、關西地方の風俗習慣とは全く別なものである。

従つて北海道の民屋を考察するに當つてはその土地の氣候と移住民の歴史とを併せ考へて判斷する必要がある。

村山二郎氏に依ると北海道の住家を次の九種に分類されて居る。

- 一、石置屋根の家屋
- 二、洋風木造家屋
- 三、板小屋
- 四、土壁の家屋
- 五、草葺屋根の家屋
- 六、土藏造の家屋
- 七、煉瓦造又は石造家屋
- 八、コンクリート造家屋
- 九、アイヌの家屋

而して之等九種類の家屋に於て詳細な説明があるが、今その概略を記して見よう。

## 二 建築上の分類

一、石置屋根の家屋 此の種類の住家は一般に堅固に出來て居る。屋根に野石を置いてゐる。

るのが特色で、相當大形のをコバ押へに竝べたものや、又風の強い處ではやや小さな石をベタ一面に竝べたもの等がある。何れも破風板及びこれと直角な位置に軒先にとりつけられた板(俗にこれをも破風と稱してゐる)で屋根の縁を組んでゐる。壁面は元來和風下見であるが、洋風下見のものも此の頃は相當に見られ、中にはペンキ塗のもの等もある。此の形式のものは妻の部分だけに土壁を用ひてゐる。此の種の家の殆んどすべてが出格子を持つて居て、その組方も自からさまつた様式をなしてゐる。

入口には庇があり、入口の戸は板戸または上半部のガラス戸で、腰板に頭のまるい鋸の打つてあるものが多く、まれにはガラス戸代りに紙障子のものも見られる。

この石置屋根の家屋は海岸の漁家に多く、網倉、雑倉等の附屬してゐるものが多い。即ちこの種の家屋は北陸日本海沿岸にある系統のもので、青森・秋田・山形邊の移住者によつて移植さ

れたものと考へられ、北海道草分け時代から建て始められたものと思はれる。

北海道南部の漁村の家屋は殆んど此の形式のものであつたらしい。明治十九年の函館の風景寫真(函館圖書館藏)を見ても殆んど總てが石置屋根の家屋である。今でもまだ當時のままものが存在して居る。

二、洋風木造家屋 この形式の家屋は殆んどトタン葺で上方に突出した棟飾りがあり、全部が四注(寄棟)で切妻のものは全くない。壁面は洋風下見張で、通りに面した部分だけにペンキが塗つてあるのが通例で、軒飾及一階二階の間にある蛇腹はペンキの部分に止められ、背面は多く次に述べる板小屋の造になつてゐる。

窓は上下げ窓が最も多く、極古いものには兩開き又は其れに兩開きのヨロイ扉のつけられてゐるもの等もある。根室の様な寒氣の殊に厳しい處では二重窓が使用されてゐる場合が多いが格子窓をも併せ用ひてゐるもの多く、それは石

置屋根時代の名残りとも見られる。入口はガラス引戸で、古い頃造られたもの以外には普通住家にはドアを用ひてゐるものが少い。

此の種の家屋は明治初年公共建築等に用ひられた洋風建築が普通住家に感化を及ぼしたものであると思はれる。それが相當に生育して行くのは多分寒氣に對して都合がよい爲に依るのであらう。

三、板小屋　これは所謂バラツク建ての意味である。屋根は殆んどトタン葺・コバ葺の二種に限られてゐて瓦葺は極めて稀である。これは瓦葺が寒氣に耐へがたいこと及び經濟上の理由によるものである。

屋根は切妻が多く壁は通常下見を用ひ下見は板を横に用ひたものと石置屋根家屋に見る如く板を縦に用ひたものがある。後者は前者より粗末な建物が多い。

窓は洋風木造家屋の上下げ窓又は兩開き窓及び石置屋根家屋に特有な格子窓を並用してゐる。

第一圖　小樽市の民屋



は朝夕板戸を開閉するため室内の冷えること、及び戸の開閉が冬季中は雪のために困難になる等の理由で、結局開閉の世話の要らないガラス入のみになつてゐる。

この種の家は木材の豊富なこと及び風雪に耐へること、工事に手間の要らないこと等の理由で開墾地に用ひられた。その最も古いものとし

る。縁側のあるものは必らずガラスを入れた板戸又はガラス戸が附いてゐる。然しガラス戸の外に更へたものは無い。これ

ては屯田兵村の家屋を擧げることが出来る。  
東旭川・江別・士別・琴似等の屯田兵村に當時のものが残存して居る。勿論それ等のものは後に追加増築した部分もある。

屯田兵家屋は屋根が切妻のもの多く、野地板を用ひず、七寸間程に木摺様の板を置いて現今のもの三倍もある分厚いコバで葺いてある。勿論天井等は張つてない。壁は極めて粗雑に造られてある。窓は琴似のものは比較的ガラス戸が多く且つ縁も廣く入口も特に玄關らしく造つてあるが、江別のものより後に建てられたものは、琴似のものより幾分造作が粗末である。

一般の農家に共通な廣い土間が此處にもある此の土間は夏季は農具置場、秋冬には收穫物及び越年のための食料等の貯藏場となる。

建築材は土臺・柱・梁等はセン・ナラの類で木造りは小樽でされたもの、輕便鐵道又は馬背で運送して來て組み建てたものだといふ。柱梁等釘打ちのままの部分が多い。

屯田兵村の附近に建てられた家屋はそれに眞似て造られたものが多い。

四、土壁の家屋　土壁家屋は十勝國池田・帶廣や天鹽・石狩等の平野の農家に多く見られる。

屋根は板小屋のものと大差なく、大體の形は石置屋根家屋と等しいが、壁面に粗カベ或は白漆喰の土壁があることが特色である。積雪に對するため、腰まわり三尺下見を打つたものもある。窓・入口等は特記すべきものがないが、富裕な農家では玄關の側に長い縁側のある場合が多い。

此の種の家屋は海に臨まない地方にのみ限られてゐる。このことは石置屋根家屋が氣候に應じて變化したものと考へられるのである。

北海道の内部には暴風雨が殆んどなく、降水量は少く、氣候は稍々大陸性である。此の氣候の條件は石置屋根家屋の下見を土壁に變へても差支へなく、粘土の得易い地方では費用も輕減

される。

この形式は東北地方の山形市附近のものと極めて類似してゐるが、果して山形より持込まれて再生されたものか、或は全く關係無しに北海道で發生して而かも同一のものが出来上つたものかは判明しない。然し寒暑の差が相當にある處では壁として木よりは土の方が都合が良く、暴風雨の心配の少い場所ではそれで十分役に立つものである。海岸の様に横なぐりに雨の降る地方では育ち得ない種類の家屋である。

五、草葺屋根の家屋 屋根の葺上材料が草のものを總てを括めてこれに入れる。壁は板張りのもの土壁のもの草のもの等があり、又棟等の細部の手法は種々雑多である。

六、土藏造りの家屋 これは町中のものに限られてゐて、セイガイ造とも稱せられてゐる。屋根は總て瓦葺、壁は黒又は白の漆喰で念入りな仕事で角みがきにしてある。北海道では町らしい町の出来た頃から明治の末までに盛んに造

られたものらしく、今は特に老舗風に建築するものの外は少い。江戸の町の町家そのまゝ真似たものらしく思はれる。

七、煉瓦造又は石造家屋 住家としてはその數極めて少く、町家に少しは見られる程度のものである。多くは土藏造の家屋に横して造られてゐる。

八、コンクリート造家屋 住家には未だ無しと言ひ得る程に稀で、やつと町家や事務所の類に用ひられてゐるもの

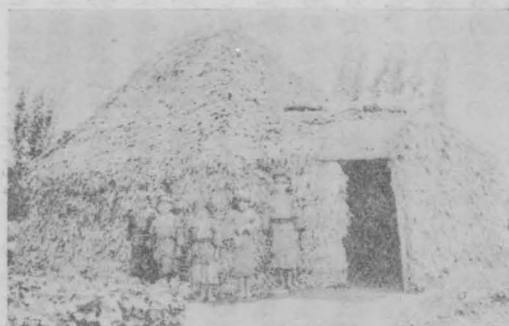
九、アイヌの家屋 これはアイヌ特有の家屋で草葺屋根のもの多く、稀には笹や樹皮で造つたものもある。アイヌの家屋に關しては別に詳しく説明することとする。

### 三 アイヌの家屋

アイヌの家屋はその平面形に特色がある。モセムと稱する玄關に相當する部分があり、その奥に廣い一室があつて、其處には中央に爐が掘

つてある。周圍に寢床や寶物置場等が一定した位置にある。

現存せるアイヌ住家は随分日本化してゐるものもあるが、もとは粗末な掘立小屋で室内も土間で寢床だけがトコになつてゐて、土間には苳草や葎類で編んだ *apuki* と稱する「すのこ」の様なものを敷き、其上にキナ蔴が敷かれてあつたらしい。



第二圖 アイヌの住家

組とは繩で固く結びつけられる。周圍の壁及び

屋は全體としての構造は掘立小屋式である。柱と小屋

屋根は笹を用ふるものと萱を用ふるものがある。其の地に得られる植物を使用するわけである。

棟木の所には笹や萱が風に吹き飛ばされぬ様にするため色々の工夫がこらされてゐる。大抵三本の長い横木が内側の棟木や合掌に繩で離れぬ様に結びつけられる。又この部分だけ他の材料や皮等で覆ふたり又草(土つゝ)等で覆ふたりする。

彼等の家屋は住地・材料・形體に依つて次の四種類に分つことが出来る。

一、キキタイチセ *Kikitai-chise* 萱葺のものでシクキシナイ邊より白老邊に至る地方にある。

二、シャリキキタイチセ *Syarikikitai-chise* 蘆で以て作られる。四方の圍ひを籬の如くにして作つてゆくやり方である。下等の家屋では萱と草とを以て作る。

以上の二つが最も代表的なアイヌの住家であ

る。

三、ヤラキタイチセ Yarakitai-chise 木

の皮(主としてガンビ)で葺かれたるものであるが六、七十日も経ると木の皮に龜裂が出来るので草や茅等で修繕したものもある。ピロウ邊からクナシリ邊にかけて分布する型である。

四、タヘルプキキタイチセ Tappe ruppukitai-chise

竹の葉で屋根や壁を作つたものこれも木の皮の場合と同様、日敷の経るに従つて葉が枯死するから所々に空隙が出来て、よく雨もり等がある。

以上の四種のアイヌの民屋は中根助八氏の記述に依つたものである。

四 暖房設備に就て

部屋を暖める設備としては一般に用ひられるものは爐である。北海道では各戸の茶の間に爐を持たない者は無い。自在カギを天井から釣つて鍋や鐵瓶を下げる。町では木炭を田舎では薪

を燃料とする。

木炭を用ひるものに爐ブチの中央に金屬製の輪(俗に爐鐵と云ふ)を据ゑ其の中に灰を入れて、爐ブチとの間に爐砂と稱して小砂利を入れる。これが代表的の形式で其の爐砂を美しくして置くことが一つの習慣になつて居る。近頃砂利の部分に銅やトタン板で張りつめたものもある。

コタツも相當利用されるが内地の他の部分の様に火鉢のみでは不十分である。爐を用ひない家ではストーヴがある。燃料に薪を用ふるものと石炭を用ふるものがあり、事務所風の處では石炭を用ふるが、居室用としては薪を用ふるものが多い。ストーヴは富裕者に限らず農家等でも広く使用する。石狩平野の様に田畑を開墾した爲め、雜木の比較的少い地方の農家ではモミガラ等をも燃料として用ひる。

五 防風雪設備に就て

寒さを防ぐ消極的方法として防風設備がある。殊に風の強い海岸地方では古い舟板を利用して出入口の外側に圍ひを造つたり、ドンガイといふ枯れた草の莖を立て竝べて家屋の周圍に垣を造つたり、或は風上に向つて一方だけ特に防風壁を造つたりして居る。殊にこれ冬に吹雪が家の中へ舞ひ込む季節に特に必要である。従つて地方によつて季節的のものゝと恒久的のものゝとがある。

防風以外に積雪に對する防雪設備がある。その多くは屋根の「雪止め」である。屋根に積つた雪が一時に迂り落ちる時は案外な危険を伴ふもので、これを防ぐ爲め雪國では一般に屋根の勾配が緩である。一寸考へると勾配が急であると雪が積らない様に思ふけれども事實はさうでない。そして積つた雪は僅かの傾斜でも、若し下層が家屋内の温みで解けると、一時に雪崩れ落ちるものである。これは誠に危険であるから屋根の積雪が滑り落ちない様に雪止の設備をす

る必要がある。

北海道の雪止めは北陸・山陰海岸のものに比して堅固に造られてゐる。外觀をかまふよりは安全を期することが必要である。その構造は屋根の上に棟に並行な方向に棒或は角材を置くことである。勿論これを固定さす爲め或は鐵細棒（ポールト）或は材木で棟から吊されてゐる。

北陸海岸に用ひられる雁木の設備は北海道には見られない。それは一つには積雪量の少い爲めでもあり、又吹雪には雁木も役立たない爲めであらう。北海道の海岸では暴風雪が多いのである。

窓は一般に腰が高くしてある。室内で窓臺まで二尺五寸乃至三尺四尺に及んでゐる。これは積雪の時にも採光し得る様に造つたものである。

## 六 結 論

北海道では移住民の歴史より考へて東北地方



の海岸漁村の家屋形式がその儘北海道南部の漁村に移されたといふことは當然である。自由移民の時代即ち屯田兵以前に於ては、初め函館・福山・江差等の半島部海岸に限られてゐたが、後次第に東海岸の釧路・根室、西海岸の石狩・増毛遠くは北海道の網走邊へ迄續々と漁村が拓かれた。この爲めに此等海岸地方殊に半島部の漁村には石置屋根の家屋が多いのである。

石置屋根は本來のユバを石で押へてゐたものであるが、柿葺に改まりそれが海岸より内陸に入るに從つて石の要がなくなり、此處に板小屋が發生する。明治初期に石狩平野開墾の先驅として設けられた屯田兵小屋は板小屋である。移住者は假の宿として簡単な安價な板小屋を造る。北海道の住家の過半が板小屋であるのはこ

(八二頁より續く)

石炭及び船舶用品と地方に消費さるゝ綿布類雜貨等の輸入と同地方の産物の輸出とを合せたものである、従つてアデン自體の貿易は人口も少く市場の價值は頗る狭範圍であるけれども、その地理的位置は伸縮港として優越なる地位をしめ、歐米及び本邦より製造工業品を輸入して之をアラビヤ諸國及アフリカ地方に再輸出し、又は後者の産物を歐米や日本に輸出するので其伸縮貿易額は全貿易の八割に達する、この八割のうち對紅海沿岸及アラビヤ諸國との貿易が過半をしめる。

日本はアジアとしてはイラクについて輸出入の第二位をしめ其割合は一二％であり、英國は三〇％以上にのぼる。

の爲めである。

板小屋の後に造られたものは土壁の家屋であらう。住家に土壁の用ひられるのは住む人達に土着の心が生じて來た結果である。概して北海道の住家はバラツクである。此の傾向は北海道を北へ行くに從つて切に感じられる。北海道に生活して居る人達はその粗雑な住家の爲めに生活上少なからざる損失を蒙つてゐる。防寒の爲めの燃料の浪費とか、不完全な保温による勞働の能率上の損失とか考慮すべき點は多々ある。個人個人は現狀で耐えて行くかも知れないが北海道全體の損失は重大である。

國家が眞に北海道の開発を望むなら移住民の奨励は勿論必要であるが、それと共に移住者の住家に就いても大いに考慮することが緊要である。